

2022 22th グループ環

大丸藤井セントラル・スカイホール

(公財) 道銀文化財団 道銀芸術文化助成事業

# 私の制作

今という時代にあつて

作家は

どんな思いで作品に向かい

どのように描こうとして

いるのだろうか



安達 久美子 Adachi Kumiko

無限で止め処なく流れ四季折々で変化する川、その表情は尽きることのない魅力です。川面に差し込む光が流れに戯れ、静寂な岩肌と透明な川床を作り出す。これを真正面から捉えてその感動を画面一杯に力強く表現したい思いで描き続けてきました。絵を描ける環境と時間が持てることに感謝しつつ、これからは一息入れて色々なモチーフに挑戦してみたいと思っております。



枝広 健二 Edahiro Kenji

見慣れた身近な光景、時の流れや移り変わり、人々の様々な思いや願いが刻まれながら穏やかに営みは続いていく。  
春の風、新緑の梢、秋色の空、雪の朝道を急ぐ白い息、コートにマフラー、スマホを手にバスを待つ厳しい冬の日、雪模様、四季の移ろい…巡る季節に新たな時が訪れる。そのような日々の暮らしの中、佇む気配や息づかい、空気、存在が感じられるような情景、風情を大切にしたいと考えている。



猪狩 肇基 Ikari Chouki

私はかつてグループ・ゼーエン(学生時代同期の仲間と結成)に所属していた。ゼーエンの意味は「視・見る」である。画家として何を見てそれをどう自分のオリジナルで表現するか、また、お互いの作品を見て学ぶ等を重点にした名称である。それをモットーに我々は切磋琢磨して制作に励んだものである。

今、この環展においても私の姿勢は変わらない。技術の向上と新しいモチーフにも挑戦しているが、人物の有無へのこだわりは続けて行きたい。



香取 正人 Katori Masato

風景が好き。中でも住む人々と関わりの深い、そして特色があり歴史を感じる風景が良い。人物はほとんど描かないが画面から人の気配や生活がにじみ出てくるような絵を描きたい。

制作上では構図が大切。納得するまで何度もやり直すしかない。また自分の色を創り出す努力も続けながら四角い画面の中から多くのメッセージが出るよう描き続けている。



岩佐 淑子 Iwasa Yoshiko

小さい頃から誰もが慣れ親しみ、身近に感じる水彩、その特徴を生かしたすばらしい作品を目にすることが多く幸せでした。大きな作品の制作にはひと手間かける事を心掛け、その中で薄い絵の具の層を重ねて深みを出す方法も学びました。いろいろな描法や技法を用いる事によって具象、半具象、心象的な表現を、そして絵の世界では大先輩方の背を追いながら、ひたすら描き続けることを願っている今日この頃です。



北山 寛一 Kitayama Kanichi

「ホロナイ鳥瞰」

ひつきょう

私の場合、絵を描く喜びとは畢竟このテーマに50年以上かかって辿り着くことだったので。幌内(三笠市)を軸として北海道の歴史を調べるにつけ、益々イメージが膨らみ、その中で自分の存在が実感出来ます。

私にとっては心の空白部分が多かったこの地での少年時代でしたが、2019年に幌内出身の写真家故及川清治郎さんの昭和30年代における数多くの写真に出会った感動が現在の制作を後押ししてくれます。



**合田 典史** Goda Norifumi

最近、描くことの難しさを痛切に感じることが多い。風景が好きでその情景や肌で感じる空気感を表そうとするが時間の経過とともにその時の感覚が薄れ遠ざかっていく。画面を構成する様々なものにそこに存在する意味を持たせていくよう心掛けているが、描けば描くほど自分のイメージが拡散していき先に進めないことが多い。苦労が多く、時間ばかりが経過していく。なかなか充実した表現につながらないようだ。



**白崎 博** Shirasaki Hiroshi

深夜、立てかけた画面に岩絵の具をおく時のサラサラと響く音が好き。そんな時はとりわけ僕にとっての「いい絵」が頭に浮かび、古今東西の画家・画工の理解を超えて創造する力に心打たれる。いつか僕もそんなふうには描けるだろうか。かつて、高山辰雄が学生時代に「絵とは？」と問うた時、先輩の山本丘人は「絵は人だよ」と答え、師の川合玉堂は「絵は精神じゃ」と。70を超えてきた今ようやくその言葉の意味に触れられた気がした。



**小堀 清純** Kobori Kiyozumi

「単純は偉大なり」

私は写実画にこだわり描いているがその表現は難しい。写実画は見えるものをそのまま再現するのではなく、見えるものを通して見えない様々な感覚や考えを呼び起こして描くものと考えている。写実に徹する余り、描写が細くなるのが悩み。

「単純は偉大なり」という言葉があるそうだが、如何に単純化するのかが課題だ。



**中吉 功** Nakayosi Isao

描き散らかした未完成の絵が山ほどある。一旦は完成とした作品の中にも手を入れたい作品が結構ある。一日は短い。描く時間が足りない。しかし描かねばとの思いが強い。一日を効率よく行動し、心身ともに良好な状態で絵を描きたい。次に過去の取材したスケッチ資料を基に北の風景、山・河・花などのモチーフに新しい息吹を与えるため構成、色彩、技法の研究を重ねて、心に響く作品を創り上げたい。



**小杉 千賀子** Kosugi Chikako

風景を描く。それはどこの風景だろう。描いてみたいと思わせる風景は、どこか心の奥や記憶のなかにリンクしているのだと思う。古い木道や森の樹々光や風や水の中にいつか見たかもしれない風景を探し求めている。透明水彩の色は美しいが、紙に塗って乾かしてみるとその美しさは半減する。美しさをとどまらせるために下地を工夫する。メディウムを混ぜてみる。そんなことを試しながら制作を続けている。



**山田 則意** Yamada Norioki

私が描いているモチーフは、日々の生活の中でごく当たり前の光景で身近にあるものです。共に生活し歩んできた素材で歴史が感じられ風雪に耐え錆びて朽ち果てる様子の質感量感を表現したいと思っています。サビの表現には「カツテッコ」の塊を粉末にして使っています。自己満足です。地方には展覧会が少ないので、努めて来札を増やし、皆さんの作品を観て刺激を受け表現を深めることを楽しみにしています。



**佐藤 光子** Sato Mitsuko

人物を描くのが好きです。表情やフォームを通して何かを伝えたい!と描き始めます。毎日コツコツは苦手です。締め切り近くにやっとなります。時間切れで提出。結果は当然、中途半端の出来。毎回反省、なのに同じ事の繰り返しです。でもずっと飽きずに描き続けてこられたのは、表現する事への“限りない憧れ”でしょうか。人の温かみが生み出すような作品を描きたい!“どこまでいっても道半ば”を楽しみながら。

第22回

Group KAN  
グループ

環展